

企画展 ー民俗芸能のデザインー 芸能の道具立て



- I 里神楽 ー下日出谷和久津家の神楽ー
- II ささらの造形 ーささら獅子舞ー
- III 喜びの芸能 ー万作と接待餅ー

はじめに

桶川市には、祖先から受け継いだ「ささら獅子舞」「万作」「接待餅」などの民俗芸能が伝えられ、今も私たちの暮らしを彩っています。

今回の企画展示では、これらの芸能に用いられる道具や衣装を展示し、晴れの日に舞い踊る人びとの心意気や、時の流れの中で育まれた創意にみちたデザインを紹介します。

祖先が託した幸福追求のメッセージを、展示をとおして読み取っていただけたら幸いです。



〔展示期間〕

平成29年12月2日（土）～平成30年2月18日（日）

桶川市歴史民俗資料館

桶川市大字川田谷4405-4 川田谷生涯学習センター内

Tel 048-786-4030

E-mail rekishi@city.okegawa.lg.jp

I 里神楽 一下日出谷和久津家の神楽一

下日出谷の和久津家は、昭和初期から40年代まで里神楽の太夫元をつとめ、近辺の神社の祭礼に招かれ、神楽を演じていた。

この神楽を始めた和久津伊作氏（明治27年生）は、製茶業を営む傍ら、神楽を習い覚え、地元下日出谷の仲間とともに一代で太夫元となった。和久津家に伝えられている神楽の衣装や面などの道具は300点を超え、現在、桶川市指定有形民俗文化財となり、当館に収蔵されている。

これらの道具は、神楽師の交流の中で譲り受けた面や、家族で手作りした衣装が含まれ、当時の神楽太夫の暮らしや演目の姿を今に伝えている。



和久津社中 昭和40年ころ



大拍子

里神楽の太夫は、面や衣装などの道具を保有し、神楽師を率い、「大拍子」を打って舞を差配する。

代表的な演目として「住吉」と「三番叟」があり、和久津家にも、面や手作りの衣装が伝えられている。



神楽面



住吉神の面と採り物



三番叟の衣装



神楽太夫と面

「勝」の焼き印が押された面は、和久津太夫が、川越中福の神楽太夫であった根岸勝広氏から譲り受けたものであろう。

II ささらの造形 一ささら獅子舞一

獅子舞は、日本の民俗芸能の中でもっとも数が多い芸能である。とくに、腰に太鼓をつけた舞い手がそれぞれ獅子頭をいただいて3人一組で舞う獅子舞は東日本に多く、関東地方では「ささら」あるいは「ささら獅子舞」と呼ばれている。三匹獅子舞を伝える村は100か村を超えるといわれている。

獅子は「お獅子様」と尊ばれ、獅子が村人とともに舞い遊ぶことは、秋、あるいは夏の祭りとして大切に行われてきた。

桶川市内のささら獅子舞は、市内東部の小針領家と、市内西部の川田谷の前領家、松原、三田原の各地区で伝承されている。

今回の展示では、獅子頭をはじめとする桶川のささら獅子舞で使われた衣装や道具をもとに、その伝統や特徴を紹介する。

三匹獅子舞の系譜

三匹獅子舞の起源については詳らかではないが、江戸時代初期に描かれた『江戸図屏風』の中に、江戸の路上で演じられる同種の芸能の姿を見ることができる。

また、関東地方の古式の獅子頭に記された年号には江戸時代初期にさかのぼるものがあり、徳川幕府による平和と安定の中で、村の芸能として定着していったと考えられる。



前領家のささら獅子舞（川田谷）



ささら（簾）



『江戸図屏風』に描かれた獅子舞

獅子と宰領

ささら獅子舞は、その芸態に各地の変異がある。桶川市内においても、県内東部地区の特徴をもつ小針領家のささら獅子舞と川田谷のささら獅子舞にはそれぞれ特徴がある。

川田谷のささら獅子舞では、頭の全長が長い平たい作りとなっており、三田原地区ではこれを龍神頭とする伝承がある。

また、川田谷を始め、北足立北西部のささら獅子舞では道化を兼ねた「宰領（さいりょう）」が獅子舞の中で重要な役割を果たす。松原のささら獅子舞では、舞の前半に「赤面」をつけた宰領が舞庭を清めて三頭の獅子をそれぞれ舞庭に導く、その後、「なべや」の面をつけて道化として獅子とともに舞う。道化の姿を「猿ばか」といい、江戸時代初期の歌舞伎に登場する「猿若」を彷彿とさせる。三田原のささら獅子舞では宰領の衣装に猿の神楽が描かれ、道化としての性格を象徴している。

前領家のささら獅子舞では、宰領の衣装に龍が大きく描かれている。ささら獅子舞は、稲の刈り上げを目前とする秋、風雨を司る神である龍神を招いて和ませる神事であるという説と関連するのであろうか。



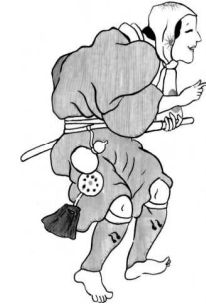
宰領の衣装 龍を描く（前領家）



宰領の衣装 猿を描く（三田原）



前領家の獅子頭 左：中獅子 中央：女獅子 右：後獅子



江戸時代初期の「猿若」



ささら獅子舞の道化（猿ばか）



宰領の面と道具（松原）
道化の面（なべや） 宰領の面（赤面）

獅子舞を支える人びと

この言葉どおり、ささら獅子舞は、練習、祭の準備と村あげでの取り組みの中で、毎年奉納が実現している。

川田谷地区のささら獅子舞では、毎年、「番付」にその年の役割を書き上げる。すなわち、番付にのることが村人たる資格であったともいえる。

番付にのる役割以外にも花笠を飾る花は女性たちによって作られ、祭りの準備を「花こさえ」と呼ぶ地区もある。

長期間休止していた小針領家のささら獅子舞では、古老の指導のもとで、小学生や中学生を含む幅広い年代の人びとが結集して、平成14年（2002）に見事に復活している。このことは、伝統の芸能がコミュニティの核となった事例として注目されている。



貝吹の法螺貝



年当番の提灯



高張提灯



子供たちに伝えるささら獅子舞（小針領家）



山車（万燈）掲げて進むささら獅子舞の道中（三田原）

III 喜びの芸能 一万作と接待餅一

踊る喜び 一万作一

桶川地方の民俗芸能で、もっとも多くの人たちに親しまれているのが「万作」であり、昭和20年代までは手踊りに加えて段物と呼ばれた万作芝居も演じられていた。

万作は、村の若者の付き合いの中で伝承され、戦後、高度経済成長期にいったん衰えたが、桶川では女性たちの参加を得て、昭和50年代には、ふたたび、多くの市民に親しまれるようになり、現在は、市内西部において、6団体がこれを伝えている。

桶川の万作で用いられる楽器は、「すり鉦」と、割竹で作った「四つ竹」のみである。かつて、段物と呼ばれた寸劇が行われていたころでも、これに拍子木が加わるといったものであった。また、手にとるものは、手振りに加える「手拭い」、万作の口開けに踊りで手にする「銭輪」といった簡単なものである。

農作業の合間や村の寄り合い後でも、だれかが、四つ竹とすり鉦で拍子をとると唄が始まり、あっという間にその場は芸の喜びに満たされる。身近な芸能である万作は、そんな力をもっていた。

桶川の万作には、「銭輪」「きっさき」「伊勢音頭」「下妻」「口説」などの演目が踊り継がれている。



万作芝居 白枳粉屋（岡村万作）



襦袢姿で踊る（薬師堂万作）



現代の万作衣装（三田原）



すり鉦



四つ竹



銭輪

喜びを分かち合う芸能 一接待餅一

餅つき踊りとも呼ばれる接待餅は、祝いの場の餅の振る舞いが、若者たちの工夫によって芸能となったものである。かつては、上棟や帯解きの祝いの場に若者が招かれ、技を披露していた。現在、市内では、下日出谷と加納、川田谷の狐塚と薬師堂に伝えられているが、かつては、坂田、上日出谷、樋詰、松原でも行われていた。

桶川の接待餅では、やぐらを組んで臼を置き、このまわりで芸が披露される。杵は餅をつく太めの杵と、曲づき用の細い杵の2種が使われる。かつて、杵は身近にあった棒屋職人に頼んでつくってもらったという。

衣装は、華やかな襦袢あるいは絆纏を用い、白い股引に草履を履き、頭には向こう鉢巻きをきりと締め、たすきを掛ける。狐塚ではたすきに鈴をつけ、華やかな雰囲気を高めている。



狐塚の接待餅



杵



臼



手桶



絆纏（狐塚）